

刺しゅう技法（ステッチ）による立体感の効果

—カットワーク—

岩 崎 奈美子*

A Study of Embossing Effects of Stitching in Embroidery

—Cutwork—

Namiko Iwasaki

要 旨 前稿において、カットワークについて技法を取りあげ、従来使われている技法と、新しい技法の各々をサンプル製作をして比較検討した。

言うまでもなく刺しゅうは、ステッチの組合わせと配列作用により物・大きさを図柄として表現する事が出来るのである。

カットワークの技法は、極めて単純なボタンホール・ステッチ、オーバーカスト・ステッチのみで刺した物である。

単純ゆえに精巧さも求められるのである。

緻密で精巧な技法で刺し、布を切り取って透し模様を作るカットワークは、ニードルポイント・レースの母体でもある事柄から、前稿では取り上げる事のなかった基礎的な技法、バー (bar)、ブリッド (bride)、ピコット (picot)、アイレット・ワーク (eyelet work=小さい穴) は、勿論刺しゅうの歴史、レース (Lace) の歴史、カットワークの技法と併用したニードルポイント・レースに至る経過を検討した。

I 刺しゅうとは

刺しゅうは布の上に糸で美しい模様を描き出していく装飾芸術である。

素材は革からガーゼ迄針の通る物ならすべて使われる。宝石・真珠・七宝などを飾った豪華な刺しゅうもあり、あまりにも豪華過ぎたので金糸や宝石を狙った悪人達が、貴重な刺しゅうをほどいてしまったのである。

刺しゅうはいつ頃どのように始まったのか述べる必要がある。

1 古代の刺しゅう

植物から繊維を取って糸に紡ぎ、刺しゅうは装飾としては勿論、一種のシンボルとしても利

用され、布地の補強をも兼ね、刺しゅうあるいは刺しこという技術が工夫され広く利用されるようになったのである。

布地やネットに刺しゅうをしたり、布地から経糸、緯糸、また経緯糸を抜き取ったり、布地のすり切れた部分を切り取ってかがり、損傷のひどくなる事を防ぎ、同時にその破損箇所を美化する技法が発達したのである。

すり切れを防ぐために衣服の縁にチロリアンテープ状に装飾をしたり、垂れ下った糸を結びつつ模様をつけたようである。

これが、マクラメ (macramé) である。

刺しゅう・カットワークなどが補強・補修・装飾あるいは象徴の技術として生まれてきたのである。

中国をはじめ多くの国では刺しゅうの形や色で階級や地位を現すものであったとされるもの

* 本学教授 服飾手芸

である。

蝶は結婚の喜び・ピンクのこうもりは幸福・鶴は長寿・おしどりは夫婦愛・かもは家庭の幸福・おうむは浮気な人妻への戒めをあらわすものだったようである。

不死鳥は美と幸福の象徴として皇后だけが使用出来、5本爪の竜と黄色は皇帝の独占物であり、花や果実にもそれぞれの意味があり、桃と昼顔は婚礼衣装を飾り・ざくろは豊稔の祈・蓮には多産と純潔の祈りがそれぞれにこめられていたのである。

インドでは、刺しゅうに関する規定が設けられ、刺しゅうの用途と図案について、どの様式の刺しゅうはどの場所ですると細かく決められ主な地方では人々の生計の道になり家業として定着し、技法は親から子へと受け継がれていったのである。

古代ペルーでも色鮮やかに染色されたラマの毛糸で儀式用の刺しゅうは、編み物かと思われる程だったのである。

ペルー人は刺しゅうの針目を使って創り出したのは、手のこんだ見事な布だけではなく立体的な房飾りや、小鳥・人形などの図案の縁飾りも針の先から生み出されたものである。

古代ギリシャやローマでは、トーニカやトーガ（どちらも古代の外衣）の縁を幾何学模様の刺しゅうで飾るおしゃれが流行したそうである。

エーゲ海では、華麗な金糸刺しゅうの肌着を競って身につけ、製作者の名は優れた金糸刺しゅう職人として鳴り響き、イギリス刺しゅうにも受け継がれたのである。

2 中世の刺しゅう

11世紀にフランスで製作されたタペストリー (Tapestry) 長さ69 m, 幅51 cm, 亜麻布に毛糸で刺しゅうした壮大なもので宮廷に仕える婦人達が綵がかりで刺し上げた物であると思われる。

11世紀から13世紀はイギリス人がノルマン人の支配のもとに繁栄を謳歌した時代である。

彼らの刺しゅうもオプス・アングリカヌム

(イギリスの手芸の意) の名でヨーロッパ全土に広く知られ、主に祭壇や聖職者の祭衣を飾ったのである。

国王から教皇への献上品にさえなったほどで主に絹糸が使われ、複雑精緻な図案を繊細に刺した物であり、大変貴重な物として扱われたのである。

今日ヨーロッパ各地の博物館や大聖堂には、こうした貴重な物が保存され、最初の頃のデザインは、葉・果実・鳥を円形に配置した中にモチーフを置いた物である。

ゴシック様式が流行するとこの様式もすたれアーチの内側に、聖書の中の人物を写實的に刺しゅうする事が流行したのである。

14世紀にはイギリス刺しゅうは衰え、以後16世紀迄深い眠りについたのである。

中世ドイツでは、宝石や真珠ではなくビーズが、絹糸や金糸ではなく麻の布と糸と云った質素な素材を使った刺しゅうが栄えるのである。

ビーズは18~19世紀に絵やハンドバッグ・クッションに使われるビーズ刺しゅう・白い麻布と糸が使われる白糸刺しゅうと2種類の刺しゅうが誕生したのである。

白糸刺しゅう別名カットワークは、針目は布地を装飾するだけではなく、布目を広げてレースのように表現する役目も担っており、この技法は隣国スイスにもたらされたのである。

オープンワークの魅力にとらえられた点ではイタリア人も例外ではなく、透かしの量をずっと大きく、独特の技法へと発展させ、これが有名なレティッチェラ・カットワークである。

15世紀にはレティッチェラの技法とニードルポイントの縁どりの技法を組み合わせたニードルポイント・レースに発展し精密な技法も考え出されたのである。

3 ルネッサンスの影響

15世紀には刺しゅうにも強く絵画の影響があらわれ、刺しゅうには刺しゅうの決まりがありましたがルネッサンスの幕あけと共に、針と糸は絵筆や絵の具のごとく扱われ、遠近法が取り入れられ建物も描れ刺しゅうは写實的なものへ

と発展したのである。

代々のブルゴーニュ公やメディチ家など当時の高蒙は写実様式を保護し、当代一級の画家を雇って、デザインさせた。それ程力を入れていたのである。

4 16世紀

スペインにまた新しい刺しゅうが生れたのである。

白い亜麻布に黒の絹糸で刺しゅうするので、黒糸刺しゅうと呼ばれ、当時の貴婦人達の間では、さらに金やスパングルなども加えられ使われていたのである。

同じ頃、ドイツでは写実的な刺しゅうが最高潮に達し詰め物や針金で刺しゅうを盛り上がらせた。スタンプワークと呼ばれる立体的な技法が生まれたのである。

5 17世紀

外見の華やかさより使い易さが重要視されるようになり、毛糸で刺しゅうした壁掛けはすき間風を防ぐために、椅子を汚さないためにはカバーが必要になったのである。

イギリスでは、様式化し大きさを誇張した樹木や葉・果実・花・鳥など一面に不規則に配置して刺す、ジャコビアン刺しゅうが生まれたのである。

16世紀には、ドイツのザークセン地方でポビンレースが発明され、ニードルポイント・レースはイタリアからスペイン・フランス・ベルギーにも広まるといようにレースも盛んになってきたのである。

6 18世紀

刺しゅうの主な目的は衣服を飾るという時期になったのである。

スカート・カフスなど一面に刺しゅうをする事が流行し、男性の衣服は目を見晴らせる物があつたと云われブロードの胴着を一面に覆う刺しゅうのテーマは、コートのカフスやポケット・ボタンにも繰り返して使われていたのである。

また白糸刺しゅうも外見の華やかさより実用的なシャツ類・産着にも使われたのである。

7 19世紀

ミシンの発明により、ミシン刺しゅうの図案と雑誌が売られ、更にミシン刺しゅう用の新しい布も開発されると、手刺しは急速に衰えたのである。

白糸刺しゅうで飾られた、シート・テーブルクロス・肌着・産着など特に赤ちゃんの洗礼着には、手刺しを施していたのである。

漆黒のビーズを花や小枝の精緻なデザインの中に縫いつける、黒玉刺しゅうという技法が流行し、ジャケット・バッグは、主に服喪中の寡婦が使ったようである。

本物の芸術作品を下絵に実物そっくりの刺しゅうがもてはやされたのもこの頃である。

細部には絵の具を使い、いかにも本物の芸術作品のように、実物そっくりの刺しゅうの絵が流行したのである。

8 20世紀

独創的な刺しゅうが新鮮な驚きをもって注目され、伝統的な刺しゅうが脈々と息づいているのである。

ヨーロッパの精緻な刺しゅうが姿を消して行くなかで、フランスのオートクチュールは例外である。

今世紀初頭のパリのデザイナーは、ドレスのデザインに、スパングルを使用した刺しゅうをいち早く取り入れ、この伝統は今も受け継がれているのである。

II カットワークとは

カットワーク（Cut work）の技法は7世紀にはすでにある程度まで進んでいて、高層の衣装・ハンカチーフ・シャツなどに円念に営まれていたのである。

13世紀以後は著しい進歩をみせ、カットワークの営まれた非常に高価なシャツ・ハンカチーフなどについてしばしば述べられるのである。

カットワークは、ボタンホール・ステッチによって地布にあげられるべき孔のまわりに刺しゅうを行ってのち、布を切り取って透し模様

(メッシュ)を作るのである。

モチーフの内側を切り取る物(ブロードリ・アングレーズ)と外側のバックのほうを切り取る物(ルネッサンス刺しゅうやリシュリユー刺しゅう)に区別する事が出来るのである。

又次の様に分類する事もある。刺しゅうを行ってのち、糸の内側にそって布地を切り取り、他のステッチによる刺しゅうとあいまって模様の明暗効果をあげる物と、大きく布地を切り取り、残りの部分を支柱として糸をかけ渡し、幾何模様を作りあげる物との二種類である。

プリント・タグリアート・ア・フォグリアーミ(Punto Tagliatto a Fugliami 木の葉編)とかポアン・クペ(Point Caupé)と称される物がこのカットワークで、プリント・タグリアート・ア・フォグリアーミは切り取らずに残されている布地の全面が厚く刺しゅうによっておおわれているものである。

花嫁の式服に用いられる事もあったので、ブライダル・レース(Bridal Lace=花嫁レース)、またはカーニバル・レース(Carnival Lace=祭典用レース)とも呼ばれているのである。

ポアン・クペには、幾何模様が多く布地が見えなければカットワークである事を感じさせないレース状の精巧な物もある。

1 モチーフの内側を切り取る方法

モチーフの内側をカットし、切り縁をオーバーカスト・ステッチ(Over cast stiteh)かボタンホール・ステッチ(Buttonhole stitch)で処理したものである。

オーバーカスト・ステッチとは、盛り上った線や輪郭線、特にイニシャルや組合せ文字、装飾的な図案線を表現するのに適しているのである。

比較的面積の小さい図案を刺す事が多く組合わせをして模様を作り出す事も多いのである。

(1) アイレット・ワーク

モチーフの内側をカットした穴をアイレットと云うのである。

円形のアイレット・しづく形のアイレット・

三角形のアイレット・シャドウアイレットがある。透しが多く出来る事からカットワークの事をアイレット・レースとも云うのである。

(2) アイレットで作る模様

アイレットを組合わせると色々の模様を作る事が出来る。大きさや形の違うアイレットも組合わせて、さまざまな模様を構成するのである。円いアイレットを5個並べたり、紡鐘形のアイレットを4個1組にし並べたりする事も可能である。

前記を色々に組み合わせて多種多様の模様が構成される事も可能である。

(3) カットワークの縁飾り

縁飾りのスカラップ(Scallop)はブロードリ・アングレーズによく使われる技法である。

きれいな線ですっきりとした形に刺し上げなければならぬのである。

•縁飾りのスカラップ

カットワークの代表的な刺し方で、基本的であるが、針目を揃えて刺し進むのである。次にあげる3種類がその代表である。

A・真すぐにボタンホール・ステッチで進む。この時針目の高さを揃える

B・ゆるやかな曲線を描きAと同様に刺し進む。

C・主に縁取りに使い帆立貝(Scallop Shell)の扇形に拡った波形模様の曲線をボタンホール・ステッチで線に添って刺す幅を曲線の端と中央部とは幅を変えたり半月形に刺したりする。半月形の出来上りは外側は勿論スカラップに添い内側は真すぐになるように刺し進む。

•とがったスカラップ

形態に添って針足を少しづつ変えてボタンホール・ステッチで刺し進む。

•アイレットのついたスカラップ

曲線をつけながら縁(外側)は、ボタンホール・ステッチ内側に入った所にアイレットをオーバーカスト・ステッチで刺し進む図案の下側になる所から仕上げる。

•楕円形のアイレットのついたスカラップ

アイレットのついたスカラップ同様外側はボタンホール・ステッチ、内側はオーバーカスト・ステッチで刺し進む。スカラップの中でも重なり部分が難しく技法的には高度なものである。

2 モチーフの布を残してバックのほうを切り取る方法

モチーフの布を残してバックだけにカットワークする場合はモチーフの間をあけないようにしなければならない。ブロード・アングレーズに比べ、図案は変化の富みこのカットワークはバックをカットしてモチーフを浮き上がらせる事が出来る。モチーフの間があかないようにするためには、バー (bar)・あるいはブリッド (bride=つなぎ) も、アイレット・ワーク同様カットワークを一層引き立たせるための必要な技術である。

- 直線のバー (飾りのないバー)
輪郭に添って下縫いをしながら糸を3回渡しボタンホール・ステッチの場合もオーバーカスト・ステッチの要領で糸のみをすくうのである。
A・最も良く使われる技法で、ボタンホール・ステッチあるいはオーバーカスト・ステッチの要領で糸のみをすくう。
B・バーの幅を広く仕上げたい時はWボタンホール・ステッチの要領で糸のみをすくう。
- スカラップのついたバー
バーの片側にスカラップのついたもの。飾りのないバーと同様に糸を渡しボタンホール・ステッチで戻すが途中でスカラップを作るのである。
- 枝のあるバー
三方に分かれるバー。三個のモチーフをつなぎ合わせる時に使われる物である。
飾りのないバーと同様にボタンホール・ステッチでかかるのであるが下縫いおよび上縫いは大変複雑である。
- ピコット (picot) のついたバー
ピコットとは、おもにスカラップステッチ

の縁かがりやバーにつける飾りの技法である。

飾りのないバーと同じ要領でモチーフの間に糸を渡しボタンホール・ステッチでかがりながら中央迄進み、糸をループ状にかけて作るのである。

ニードルポイント・レースの技法では、ベネジアン・ピコットバーとも云うのである。糸を回しただけのピコットの縁取りや、スカラップにプリオンピコットをつけた、プリオンピコットスカラップという技法もある。

III レースとは

レースの起源は古く、ヘムとかフリンジを意味する言葉だったようである。古代エジプトでは衣服のフリンジとして使われたのである。

レースは、組紐または紐を千鳥掛けに引き締めて結ぶことを意味していたようであるが、古代・島・獣・魚を取るために、仕掛けた網やわなの形状に似ているために、ララン語のラク (Laqueu) から、古代仏語のラン (Lassis あるいは Lacis=わな輪索の意) を通して派生したこの語が用いられたのではないかと想像されているのである。

レースという語が尼僧院において誕生を見た程、レース作りが尼僧院の日課となってレースは、ナンズ・ワーク (Nun's work=尼僧の手芸品) と呼ばれていたと言われていたのである。

13世紀初頭においては、ダーンド・ネッティング、カットワーク、ドロンワークなどの技法のあった事が述べられており、かなり精巧な透孔状の編物、あるいは刺しゅうが製作されていたとされているのである。

カットワークとドロンワークの併用で、ダーンド・ネッティングの効果を出すなどの方法も見られるのである。

徐々に土台となる布地を大きく切り取ったり糸を多く抜き取る方法にと変化し、ほとんど布

地の使われている事がわからないようなレースが誕生したのである。

レディチェラ (Reticella Reti=細糸の意) がカットワーク・ドロンワーク・刺しゅうを併用して、四角形を基にし、それに円・ロゼット・星・斜十字などを配した幾何模様が多く、従来のレースに比べ、はるかに繊細なレースになったのである。

・レディチェラとは

ギリシア・レースとも呼ばれるが、そのほとんどはイタリアで作られていた。これは、14~15世紀ごろのイタリアで、ギリシア製の金銀糸のネット風のレース、幾何模様のカットワーク・ドロンワークが非常にもてはやされたため、これらの感じを真似て作ったレースを言い、あるいはギリシア・レースと呼んだのである。

布地を用いず糸のみで仕上げる(編む)ニードルポイント・レースが15世紀末期に、案出されたのである。

1 ニードルポイント・レースとは

ルネッサンス期に入りようやく、ニードルポイント・レース (Needle Point Lace) という特殊な技法のレースが一般に行われるようになり土台布を全く使わず1本の針と糸だけで作るものである。

一般に使われているイタリア語のプント・イン・アリアは、ここから生まれ、英語では (point in the air) 空間に針先でかかるものという意味らしいのである。

もっと古い時代の、ニードルポイント・レースの原形はイタリアのレティチェラ・カットワークに大変似ていると言われているのである。

17世紀にスペインやイタリアのレースは輪郭を盛り上げ、モチーフの間を装飾的なバーでつないだ、分厚くて目もあやなレース、18世紀のフランスではバーに代って、ルゾーと呼ばれる薄い絹のネットが、モチーフをつなぐのに使われはじめられた。ニードルポイント・レースにあらわれたもう一つの変化は、機械レースの開

発、19世紀にネットを作る機械が発明されて、ニードルポイント・レースの座は、機械レースに譲り渡されてしまったのである。

ま と め

カットワークのステッチを検討するには、レースとの深いつながりがあり、レースを検討するには、カットワークとの相互関係を検討しなければならないのである。どちらも膨大であることが判明した。単純なボタンホール・ステッチとオーバーカスト・ステッチは1本の針と糸を使い、布を使用すればカットワーク、布を使用しないで糸のみで構成されたものを、ニードルポイント・レースである事も検討出来た。同じ空間を構成させるのに、技法が違って、似かよった作品を製作する事が可能かと思われるのである。

更にレースへと結びつける為には、ドロンワーク・オープンワーク・ハーダンガーワークの検討も忘れてはならないのである。

古代から、緻密で精巧な技法を今現在も受け継いでいる事は素晴らしい事である。

しかし現代社会においては、機械の発明により、すべて簡便になり手仕事も、かつては日常の技巧も今日では、過去のものになりつつある現在において、カットワークの作品を製作する時、手仕事の尊さ・優雅さ・創造力の見事さを受け継がなければならないのである。

本研究を通じ実現出来れば喜ばしいことである。

参 考 文 献

- ◎市川久美子のカットワーク・画報出版東京社
- ◎世界大百科事典・平凡社
- ◎広辞苑・岩波書店
- ◎文化服装講座・文化出版局
- ◎レースの歴史とデザイン・財団法人日本繊維センター
- ◎The Art of Embroidery・Thames and Hadson
- ◎Encyclopedia by Needlework・Merese de Dillmont